

アダム・スミス著『国富論』における 「紙幣過剰」分析について

松 尾 純

I. はじめに

アダム・スミスは、自著『国富論』¹⁾において、商品の「供給過剰」問題に幾度も言及しているが、こうした問題に関する彼の基本的立場は、商品の一般的供給過剰の発生を認めない立場である。例えば、『国富論』には次のような論述が見られる。「どんな商品でも、その市場価格の偶発的で一時的な変動 (occasional and temporary fluctuations) は、その価格のうち賃金と利潤に分解する部分に主として影響する。地代に分解する部分が受ける影響はそれより少ない。…そのような変動は、商品あるいは労働が、…たまたま市場で供給過剰となっているか供給不足となっているか (over-stocked or under-stocked) に応じて、賃金または利潤の価値と率との両方に影響する」(p. 72; (一) 111 頁)。見られるように、スミスは、商品の「供給過剰」・「供給不足」は、商品市場の「偶発的で一時的な変動」によって発生するという認識を持っているのである。

ところが、他方、特殊な商品・貨幣を代理する紙幣については、「紙幣過

1) Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, in two volumes, vol. I, II, London: Printed for W. Strahan; and T. Cadell, in the Strand, 1776. [Facsimile ed Tokyo: Yushodo, 1976], 訳書は、アダム・スミス著・水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』岩波文庫, (一), (二), (三), (四), 2000, 2000, 2001, 2001年を使用する。以下、本書からの引用に際しては、引用文の直後に、引用箇所初版原書ページと訳書ページを、例えば次のように示すことにする。(p. 123; (一) 321 頁)。

キーワード：アダム・スミス、『国富論』, 紙幣過剰, 融通手形, 約束手形

剰」「紙幣の供給過剰」(overstocked with -paper money)・「紙幣の過剰流通 (excessive circulation of paper money)」等々の表現を用いて、大きな紙幅を費やして、いわゆる「紙幣過剰」問題を取り上げ、「紙幣過剰」の実態や発生原因などについて、さまざまな観点から詳細な議論を展開している。つまり、スミスの「紙幣過剰」問題の分析は、上記の一般的な商品の「供給過剰」問題とは大きく異なる問題意識をスミスが持っていたことを、『国富論』の論述の中に見て取ることができるのである。

そこで、以下、本稿では、この「紙幣過剰」問題に関するアダム・スミスの議論を詳しく見ていくことにしよう。

II. 『国富論』第1篇第4章のアダム・スミスの貨幣論

『国富論』におけるスミスの「紙幣過剰」分析の詳細を見る前に、貨幣・紙幣論の分析の基本視角ともいべき彼の貨幣・紙幣認識をまず確認しておくことにしよう。『国富論』におけるスミス貨幣論の基本内容は、経済学説史の教科書に常に登場し紹介されていて、その内容は、簡単明瞭であるが、議論の基礎・出発点として、その内容を確認しておくことは、一定の意味を持つであろう。

『国富論』におけるスミス貨幣論の初出は、第1篇第4章「貨幣の起源と使用について」においてである。その内容は、以下のようなものである。

《「分業が完全に確立」すると、人々は、「自身の労働の生産物のうちで彼自身の消費を超える余剰部分を、他人の労働の生産物のうちで彼が必要とする部分と交換する」「商業的社会」が成立する。この社会では、商品交換の「不便を回避するために」、人々は努めてきた。その結果、「人びとが自分たちの勤労の生産物との交換を拒否することはほとんどないだろうと彼が想像する、何かある商品の一定量を、彼自身の勤労の特定の生産物のほかに、いつも手もとにおいておく」こととなった。そして、「種々さまざまな商品がこの目的のためにあいついで思いつかれ、かつ使用された」結果、「ついに人びとはこの用途のために、…金属を選ぶことにきめた」。「さまざまな金属

がさまざまな国民によってこの目的のために用いられてきた」が、最後に、「金と銀が、共通の商業用具」となった。しかし、当初は、「それらの金属はこの目的のために、もとは刻印も鋳造もされない粗製の延べ棒で用いられた」が、「粗製の状態で金属を使用することには、2つのきわめて大きな不便」（重量をはかる手間、試金する手間）があるため、それを避けるために、ついに、「特定の金属の一定量に、公的な刻印を押し」こととなり、「鑄貨」が成立した。かくて、「貨幣がすべての文明国で普遍的な商業用具となった」のである。》(p. 27-p. 33；(一) 51-60 頁)。

以上は、『国富論』第1篇第4章「貨幣の起源と使用について」の要約である。その内容は、『商業的社会』では、商品交換をスムーズに遂行するために、「特定の金属の一定量」に「公的な刻印」が押し、「商業的社会」の「共通の商業用具」としての「鑄貨」が発生する」というものである。

この『国富論』第1篇第4章では、「流通手段」・「商業用具」機能を果たすために「特定の金属の一定量」が「鑄貨」として選ばれる経緯と事由が説明されているが、スミスは、これらの機能以外にも、貨幣は「価値尺度」機能を持つことを指摘している。「同じ時と所では、貨幣はすべての商品の実質的交換価値の正確な尺度である。」(p. 35；(一) 74 頁)。「商業の用具としての機能と価値の尺度としての機能という、貨幣の二重の機能 (double function of money, as the instrument of commerce and as the measure of value)」がある (vol. II. p. 2；(四) 259 頁)、と。

以上が、『国富論』におけるスミス貨幣論の基本内容である。ここで指摘すべきは、これらの叙述には、紙幣の「過剰」などという事態に関する言及は一切存在しないし、また、そこから紙幣の「過剰」問題を引き出し展開していくこととなるような契機を一切見いだすことができないということである。

ところが、『国富論』第2篇第2章では、その様相が大きく転換される。スミスは、第2章後半において、紙幣の「過剰」問題に関して詳細な議論を展開している。

Ⅲ. 『国富論』第2篇第2章におけるアダム・スミスの貨幣・紙幣論

(1) 「社会の貯えstock全体の一特定部門」としての「貨幣」

『国富論』第2篇第2章の冒頭部分において、スミスは、貨幣が「社会の貯え全体の一特定部門」であるということを比喩を交えつつ説明し、第1篇第4章において述べた「貨幣」の「性質と作用」の説明を敷衍している。スミスの論述は、以下のようなものである。

貨幣が「社会の貯え全体の一特定部門」であるという認識は、第2篇第1章「貯えの分類について」における「貨幣は流動資本の一部である」とする議論の継続である。すなわち、社会全体の「貯えstock」は、3部門に分かれる。第1は「直接の消費のために留保される部分」、第2のものは「固定資本」（「職業上有用な機械」・「利益の上がるすべての建物」・「土地の諸改良…に投じられたもの」・人々の「有用な能力」）、第3…は、流動資本である。（以上、p. 331-334；（二）23-26頁）。そして、この流動資本は「4つの部分からなる」。第1は「貨幣」、第2は「食料品の貯え」、第3は衣服、家具、建物の「材料」部分、第4は「本来の消費者に売却または分配されていない製品」・「完成品」である（以上、p. 334-336；（二）26-27頁）。なお、流動資本の第2~4部分は、「流動資本から規則的に引き出され、固定資本か、または直接消費用に留保される貯えにくみいられる」部分である（p. 337；（二）27頁）。

第2篇第1章のこれらの論述に続いて、第2篇第2章では、スミスは、固定資本・流動資本と社会の総収入・純収入の関係について論じている。「全住民の総収入…は、…土地と労働の年々の全生産物であり、純収入は…彼らの固定資本 [および] …流動資本から、それぞれの維持費をさしひいたのちに、彼らの自由になるもの…直接の消費用に留保される彼らの貯え」である（p. 342；（二）33頁）。「固定資本の全維持費は、…社会の純収入から除外されなければならない。… [固定資本] を維持するのに必要な材料も、それらの材料をしかるべき形にこしらえるのに必要な労働の生産物も、…純収入の一部にはなりえない」（p. 342；（二）34頁）。

これらの論述に続けて、さらに、流動資本の維持費について、スミスは次のように述べている。「流動資本の維持費については、事情は同じではない。この… [流動] 資本を構成する四つの部分、すなわち貨幣、食料品、材料、および完成品のうち、あとの三つは、…流動資本から規則的に引き上げられ、その社会の固定資本か、直接の消費用に留保される社会の貯えか、どちらかにくみいられる。… [直接の消費用に留保される社会の貯えにはいるものは]、その社会の純収入の一部になる。したがって、固定資本の維持に必要なもの以外は、流動資本のそれら三つの部分の維持は、その社会の年々の純収入から年々の生産物のどの部分をも取り去ることにはならない。」(p. 344-345; (二) 36 頁), と。要するに、流動資本は4つの部分(貨幣・食料品・材料・完成品)からなっているが、そのうち、貨幣以外の、しかも社会の固定資本に組み入れられるもの以外の流動資本は、直接の消費用に留保され、純収入の一部になるということである。

ところが、他方、いま上で除外された貨幣の維持費は、社会の純収入ではないという説明がなされる。すなわち、「貨幣は、社会の流動資本のうちで、その維持が社会の純収入の減少を引き起こしうる唯一の部分なのである」(p. 345; (二) 37 頁)。固定資本の設置費・維持費は、「社会の総収入の一部をなしてはいるが、社会の純収入からは控除されるのであり、それと同様に、一国に流通する貨幣の貯え」やその維持費は「社会の総収入の一部をなしてはいるが、同じように社会の純収入からは控除される」(p. 345; (二) 37 頁)。「個人あるいは社会の固定資本を構成する職業用の機械や道具などは、どちらの総収入、純収入についても、その一部分にならないが、同様に、…貨幣は、それ自身はそういう収入のいかなる部分でもない」(p. 346; (二) 38 頁)。「貨幣は、…資本の一部、しかもきわめて価値ある一部ではあるけれども、貨幣が属する社会の収入のどんな部分にもならない」(p. 349; (二) 41 頁)。

これらの記述によって分かるように、スミスは、貨幣は、流動資本の一部ではあるが、「貨幣が属する社会の収入のどんな部分にもならない」、つまり

総収入にも・純収入にもならないということを指摘している。

ここから、スミスは、貨幣を維持する費用を節減すれば、社会の純収入の「改良」につながるという議論を提示する。すなわち、「機械を設置し維持する費用を、労働の生産力を減じないで節減すれば、その節減はすべて社会の純収入の改良となる。それと同様に、流動資本中の貨幣部分を集め維持する費用を節減すれば、それはすべて社会の純収入のまったく同種の改良となる」(p. 349-350; (二) 42頁)。

(2)「流動資本中の貨幣部分を集め維持する費用」の節減となる紙幣使用
いま見たように、スミスは、<貨幣を維持する費用を節減すれば、社会の純収入の「改良」につながる>という認識を示しているが、この認識が、紙幣の発行や使用についての彼の議論につながっていく。

紙幣の発行や使用についての議論の冒頭において、スミスは、金銀貨に代えて紙幣を利用すれば、貨幣維持の費用が節減され、その結果、社会の総収入と純収入が増すことになるということを指摘している。「金銀貨にかえて紙幣を用いることは、きわめて高価な商業用具を、はるかに低経費で、ときには同程度に便利である商業用具に置きかえることである。…しかしこの操作がどのようにしてなされるのか、またそれがどのようにして社会の総収入と純収入のそれぞれを増すことになるのかは、まったくそれほど明らかでなく、したがってなにかそれ以上の説明を必要とするだろう」(p. 350; (二) 42-43頁)。

そこで、以下、スミスが、金銀貨に代えて紙幣を利用することによって、貨幣維持の費用が節減され、その結果として、社会の総収入と純収入が増大することになるということを、どのように説明しているか見ることにしよう。

まず、スミスは、紙幣とは何か、それが人々からいかに信用され、金銀貨と同様の流通性を持つことになるかということを説明している。「紙幣 paper moneyにはいくつかのことなる種類があるが、銀行や銀行家の流通手形 circulating notesはもっともよく知られた種類のもので、以上の目的に

もっとも適しているように思われる。/ある特定の国の民衆がある特定の銀行家の財産，誠実，慎慮を深く信頼し，いつでも提示されうる彼の約束手形 promissary notes²⁾にはつねに要求払いの用意があると信じているばあいには，そういう手形は，それとひきかえにいつでも金銀貨が得られるという信頼から，金銀貨と同じ流通性をもつようになる」(p. 350-351；(二) 43 頁)。

紙幣とは何かということの説明に続けて，スミスは，銀行発行の約束手形（スミスにとって銀行発行の紙幣³⁾が金銀貨と同じ流通性をもつことによって，国内の全流通が必要とする金銀貨がいかに節約されるかということの説明している。「ある特定の銀行家が自分の顧客たちのあいだに 10 万ポンドの約束手形を貸すものと仮定しよう。…これらの手形のうちのあるものは支払いを求めてたえず彼のところへ戻ってくるが，他の部分は何カ月も何年も…流通する。したがって，…10 万ポンドの手形を流通させてはいるけれども，ときどきの要求に応じるための用意としては，金銀での 2 万ポンドで十分なことが多いであろう。だから，こうした操作によって，金銀での 2 万ポンドは，…10 万ポンドの金銀が果たしえたはずのすべての機能を果たすわけである。…したがって，8 万ポンドの金銀が，…その国の流通から節約できるのであり，もしこれと同時に多数のさまざまな銀行や銀行家によって，これ

2) この promissary notes というスペルには，筆者の浅学の故か，疑問がある。訳本で「約束手形」と訳出されている用語の原本でのスペルは，promissory notes と promissary notes の二種類が存在する。それがどういう意味なのか不明である。スミスがスペル間違いしただけなのか，あるいは，異なる 2 つのスペルは 2 つの異なる意味を持つ用語であるのか，不明である。訳者は同一用語として訳しているので，スミスのスペル間違いと理解しているようである。その場合，スミスはどうして繰り返してスペル間違い・植字間違いしたのか不明である。因みに，promissory notes は，vol. 1 の p. 48, 111, 358, 391 と vol. 2 の 539 に見られ，promissary notes は，p. 351, 352, 359, 360, 393, 394, 395 に見られる。なお，『国富論』第 2 版，第 3 版では，これらはすべて promissory notes というスペルになっている。

3) スミスは，不正確ではあるが，次のように述べている。「紙幣にはいくつかのこととなる種類があるが，銀行や銀行家の流通手形はもっともよく知られた種類のもの」である。「ある特定の国の民衆がある特定の銀行家の財産，誠実，慎慮を深く信頼し，いつでも提示されうる彼の約束手形にはつねに要求払いの用意があると信じているばあいには，そういう手形は，…金銀貨と同じ流通性をもつ」(p. 350-351；(二) 43 頁)。

と同種のさまざまな操作が行われるならば、全流通が、そうでなければ必要とされただろう金銀の、わずか5分の1で行われるだろう」(p. 351；(二) 43-44頁)。

これに続けて、こうした銀行の操作によって国内流通から節約され、国内流通から溢れ出た金銀貨は国外に送られる、その結果、その多くの部分が勤労維持のファンドに転化し、年々の国内生産物の価値を増大させることを指摘する。「銀行業の以上のような操作によって国外におしやられ、国内消費用の外国の品物を購入するのにつかわれる金銀の大部分は、この第二の種類の品物 [=自分たちが年々消費する価値を利潤とともに再生産する勤勉な人びとの生計と雇用を追加するために必要な品物 = 材料、道具、食料品] を購入するのに用いられているし、また用いられざるをえない…。…銀行業のそうした操作によって国外におしだされ、国内消費のための外国の品物の購入に用いられる貨幣のうちで、彼らの使用のための品物の購入に用いられそうなのは、ごく小部分である。その大部分は自然に、怠惰の維持にではなく勤労の一雇用にあてられるだろう」(p. 354-355；(二) 47-48頁)。「金銀貨のかわりに紙幣が用いられると、全流動資本が供給できる材料、道具、生活資料の量は、それらのものを購入するのに用いられていた金銀の全価値だけ増加するだろう。流通と分配の大きな車輪の全価値は、それによって流通分配される品物に加えられる」(p. 355-356；(二) 49頁)。「したがって紙幣で代置されることによって、流通に必要な金銀が以前の量のおそらく五分の一に減じるとき、残りの五分の四のうちの大部分が勤労の維持にあてられる基金に追加されるならば、それだけでも、その勤労の量、したがってまた土地と労働の年々の生産物の価値にたいして、きわめて大きな追加になるにちがいない」(p. 356；(二) 50頁)。

要するに、銀行券・紙幣が金属貨幣の流通に取って代わると、金銀貨はそれだけ節約される、そして、節約された金銀貨は海外に送られ、国内消費外国財貨の輸入代金に充てられる、したがって、紙幣の使用は、流動資本の量を増加させ勤労の量を増やすことになるという訳である。

さらに続いて、スミスは、銀行や社会にとって利益をもたらすのが金銀貨の代用として発行される紙幣・約束手形であるが、それらの発行の具体的な方法について説明する。

まず第1に、為替手形を割引くという方法について。「銀行と銀行家の大多数が約束手形を発行するのは、…為替手形を割引くことによって…貨幣を前貸しすることによってである。…手形が満期になって支払いが行われると、前貸しされたものの価値は、利子という純利益とともに、銀行に回収される。銀行家が手形を割引いて、その商人に金銀貨でなく自身の約束手形を前貸しするばあい彼は、通常流通していると経験上わかっている自分の約束手形の全価値だけ余分に割引くことができる…。そうすることによって…利子という純利益をあげる」(p. 358；(二) 52-53 頁)。

第2に、銀行による約束手形の発行のもう一つの方法、「キャッシュ・アカウント」という方法。スミスの説明はこうである。すなわち、スコットランドに「最初の2つの銀行会社が設立されたとき」、「それらの会社が業務を為替手形の割引だけに限定していたならば、取引はきわめてわずかなものにとどまっただろう。そこで彼らは、約束手形を発行するもう一つの方法を開発したが、それは彼らのいうキャッシュ・アカウントを認可することである。すなわちある人が、確実な信用と十分な土地資産をもつ2人の保証人をたて、信用が与えられた一定額…の範囲内で前貸しされたどんな金額でも、要求がありしだい法定利子をそえて返済することを保証してもらえるならば、その人にそれだけの信用を与えるということである。この種の信用は、…世界中いたるところの銀行や銀行家によって一般に与えられている。しかしスコットランドの銀行会社が返済を受けるときの寛大な条件は、私の知るかぎり、彼らに特有のもので、彼らの取引高が大きいことも、この国がそのことから得た便益が大きいこともともに、それがおそらく主要原因であった」(p. 359；(二) 53 頁)。

上記引用の下線部分が、キャッシュ・アカウントの簡単な説明内容である。その具体的な機能について、スミスは、ロンドンの商人に対してキャッ

シュ・アカウントを利用するエディンバラの商人がいかに「追加的な便宜」を受け利益を得るかということ、具体的に説明している。「彼 [エディンバラの商人] は、同じ資本で、…彼の倉庫に、ロンドンの商人よりも多量の品物を保持することができるし、それによってまた、彼自身、ロンドンの商人よりも多額の利潤をあげるとともに、そうした品物を市場むけに用意する勤労民衆のより多くにたえず雇用を与えることができる。この業務からこの国が取得した便益が大きいのは、このためである」(p. 361 ; (二) 55-56 頁)。「為替手形の割引の容易さがイングランドの商人に、スコットランドの商人のキャッシュ・アカウントに等しい便宜を与えていると思われるかもしれない。しかしスコットランドの商人もイングランドの商人と同様に、容易に為替手形を割引くことができるし、その上、キャッシュ・アカウントという追加的な便宜があるのだということは記憶されなければならない」(p. 361 ; (二) 56 頁)。

IV. 『国富論』第2篇第2章におけるアダム・スミスの「紙幣過剰」論

以上、見てきたように、銀行によって紙幣・約束手形が発行され、それら紙幣が金銀貨に代わって使用されることによって、社会の流動資本の節約が可能となり、個別銀行および社会全体が利益を得ることとなる根拠が、スミスによって明快に説明されている。しかし、ここから先に議論が進んでいくと、『国富論』の基本的ワク組みから外れる「重大」問題にスミスは直面する。その問題とは、「紙幣の過剰発行」・「紙幣過剰」という問題である。

(1) まず指摘すべきは、スミスは、この問題についての論述の冒頭で、紙幣の「過剰」は、通貨(銀行券・約束手形)の発行方法の原則や貨幣元来の機能から考えれば、容易に発生しうる事態ではないということを描しているということである。彼がそう考える根拠は、流通紙幣量は、紙幣が取って代わる金銀貨の価値に等しいはずであり、その総額を超えるはずがないという彼の基本認識である。すなわち、「ある国で問題なく流通できるあらゆる種類の紙幣の総額は、紙幣がとってかわる金銀貨の価値、つまり…紙幣がな

ければそこで流通するだろう金銀貨の価値を、けっして超えることはできない。」(p. 361；(二) 56 頁)，という認識である。

スミスの基本認識としては、流通紙幣量は、紙幣が取って替わる金銀貨の価値に等しいはずであり、その総額を超えるはずがない。しかし、スミスが見た現実の事態は違っていた。場合によっては、流通紙幣量は、紙幣が取って代わる金銀貨の価値の総額を超えることがあるという現実スミスは直面する。すなわち、もし流通紙幣量が取って代わる金銀貨の価値の総額を超えるとすれば、その超過額に相当する紙幣は、銀行において金銀貨に兌換され外国に向かうことになるが、この場合、もし、この超過額の紙幣について、銀行が兌換に容易に応じず、支払いに難色を示せば取り付け騒ぎがおこることになるのである。「もしいつでも流通紙幣がその額を超えるなら、その超過は国外へ送られることも国内流通で用いられることもできないから、金銀貨と交換されるためにただちに銀行に戻らざるをえない。…この余分な紙幣全額についてただちに銀行にたいして取付けがおこるだろうし、もし銀行がその支払いに難色やためらいを示すなら、そのことによって引き起こされる不安は必然的に取付けを増大させるだろうから、取付けははるかに大規模になるだろう」(p. 351-352；(二) 56 頁)。

金銀貨への取り付け騒ぎを回避するために、いつでも即時に兌換請求に応じ支払いを実行するために、銀行はつねに金庫に金銀貨を補充しておかなければならない。そのためには、それ相応の経費が必要になる。だから、個別銀行は、個別の利害を考えると、紙幣・約束手形の過剰発行は行わない筈である。ところが、自己の利害を正しく理解し配慮できなければ、流通界は紙幣の過剰供給という事態に立ち至ることになるのである。「もしどの個別銀行会社もそれぞれの個別の利害をつねに理解し、かつそれに配慮するならば、流通界が紙幣過剰になることはけっしてありえなかったはずである (the circulation never could have been overstocked with paper money)。しかしすべての個々の銀行会社がかならずしもつねに自身の個別の利害を理解または配慮しなかったし、それで流通界は、しばしば紙幣の供給過剰と

なったのである。」(p. 364；(二) 59頁)。

繰り返して言うと、スミスにとっては、紙幣発行の原則から考えれば、紙幣の過剰発行などという事態は発生しないはずであるが、しかし、現実には「紙幣過剰」が発生する。この問題の現実の事態を確認するために、スミスは、その具体的な事例を研究していく。

まず、イングランド銀行が紙幣を過剰発行した結果、その過剰分が金銀貨と交換のために還流し、それに対応するために、イングランド銀行は、多額の鑄造のために高価格で金地金を購入する羽目になった事例を紹介している。「イングランド銀行は、あまりにも多量の紙幣を発行し、その過剰分-the excessが金銀貨と交換されるためにたえず還流したので、多年にわたって…[多量の]金貨を鑄造しなければならなかった。この多額の鑄造のために同行は…高価格で金地金を購買せざるをえず、……[巨額の損失]……。…政府は…この銀行の失費を完全に防止できなかった」(p. 364；(二) 59-60頁)。

また、スコットランドの諸銀行が紙幣を過剰発行した結果として発生する事態についても紹介している。「スコットランドの諸銀行はすべて、これと同種の過剰発行の結果、自分たちのために貨幣を集めるロンドンの代理人をつねに雇用しなければならず、その経費が1.5ないし2パーセント以下であることはめったになかった。この貨幣は荷馬車で輸送され、運送人によって保険をつけられ、4分の3パーセント、すなわち100ポンドにつき15シリングという追加経費がかかった。そうした代理人たちは、かならずしも自分たちの一雇主の金庫がからになるのと同じ速度でそれを補充できるとは限らなかった。このばあい、諸銀行の方策は、ロンドンの取引先にあてて、自分たちの必要とする金額の為替手形を振出すことであつた。取引先があとで、利子と手数料とともにこの金額の支払いを請求するために、銀行にあてて手形を振出すと、それらの銀行のうちのあるものは、過剰発行によっておちいった窮状のために、2度目の手形のひとくみをロンドンの同一の取引先または別の取引先にあてて振出す以外には、この手形を決済する手段がないことがあつた。そして同一金額、あるいはむしろ同一金額の手形が、このよう

にして、ときには2度または3度以上両地のあいだを往復し、債務者である銀行は、この累積した全金額にたいしてつねに利子と手数料を支払った」(p. 365；(二) 60頁)。

このように過剰発行された紙幣が銀行に金銀貨との兌換を求めて還流してくるが、それに対応するため金銀貨を集め金庫に補充するための費用が膨大なものになるという事例を紹介しているが、この事態をなんとか切り抜けるために、銀行は、上記のような「壊滅的な方策」を採らざるを得なくなるというのである。すなわち、「極度の無思慮で評判になったことのないスコットランドの諸銀行でさえ、この破滅的な方策をとらざるをえないことがあったのである」(p. 365；(二) 60-61頁)，と。

見られるように、スミスは、紙幣の過剰発行は、いかなる事情・目先の利益があるとしても、結局は、銀行にとって、「高い代価」を支払わざるをえなくなるということを指摘している。「スコットランドとイングランドとの両方での紙幣のこの過剰流通 (excessive circulation) を維持するのにどれほどの鑄貨が必要であろうとも、またこの過剰流通のために王国の必要とする鑄貨にどれほどの不足が生じようとも、イングランド銀行はそれを充足しなければならなかった。スコットランドの諸銀行はすべて、たしかに、自分たちの無思慮と不注意にたいして、きわめて高い代価を払った。しかしイングランド銀行は、自分自身の無思慮にたいしてだけでなく、ほとんどすべてのスコットランドの銀行のはるかに大きい無思慮にたいしても、きわめて高い代価を支払ったのである」(p. 366；(二) 62頁)。

(2)「紙幣過剰」という事態は、スミスにとっては、彼の貨幣・紙幣に関する基本認識からすれば、発生し得ない事態であるはずであるが、しかし、現実には、「紙幣過剰」という事態は発生するという事、そしてその場合、銀行にとって「高い代価」が必要となるという問題を見たが、これらの記述に続けて、スミスは、「紙幣過剰」という事態がなぜ発生するのかということ、「紙幣過剰」の発生原因について具体的かつ詳細に分析している。

まず、「紙幣過剰」という事態が発生する「根本原因」について、スミス

は、端的に、それは「大胆な投機家の過大取引」であると断言している。すなわち、「紙幣のこのような過剰流通 (this excessive circulation of paper money) の根本原因 (original cause) は、連合王国の両地方 [イングランドとスコットランド] の何人かの大胆な投機家 (some bold projectors) の過大取引 (over trading) であった」(p. 366 ; (二) 62頁) と断言している。

この断言に続いて、以下、スミスは、この「根本原因」について、具体的な事態の経緯を詳しく論じている。

まず、スミスは、銀行は紙幣(銀行券・約束手形)を発行することによって資本を「前貸しadvancing」(p. 358 ; (二) 52-53頁)するのであるが、その際、そこには、当然、適切な「前貸し」限度額があり、したがって、商人または企業家が「もし前貸しがなされなければ、彼が折々の請求に応じるために、つかわずに現金で手もとに保持しなければならない部分」以内の金額の前貸し額でありさえすれば、「紙幣過剰」という事態は発生しないはずであると主張する。「どんな種類にせよ商人または企業家に、銀行としてどれほどの前貸しをするのが適当かといえば、彼が事業をする資本の全額でも、その資本のかかなりの部分でさえもなく、もし前貸しがなされなければ、彼が折々の請求に応じるために、つかわずに現金で手もとに保持しなければならない部分にすぎない。もし銀行が前貸しする紙幣がこの価値を超えなければ、その紙幣は、紙幣がなければその国で必然的に流通するだろう金銀貨の価値をけっして超えることはありえない」(p. 367 ; (二) 62-63頁)。

また、スミスは、銀行が真正の為替手形に対して手形割引を通じて前貸しを行う限り、金庫に金銀貨が充分存在するかどうかには注意を振り向けなくてもよいはずであると言う。「ある銀行がある商人に…真正の為替手形 (real bill of exchange) を割引き、その手形が満期になるとただちに、その債務者に…支払われるとすれば、銀行がその商人に前貸しするのは、もし前貸しがないければ折々の請求に応じるため…現金で手もとに保持していなければならない価値の、一部分にすぎない。…そのような銀行の金庫を補充するのに、いくらかでも経費が必要になることは、けっしてありえない」(p. 367 ;

(二) 63頁)。

銀行が適切で・限度を心得た「前貸し」業務を行ってさえすれば、「紙幣過剰」という事態は発生しないはずである。しかし、その限度を銀行が容易に踏み越えさせてしまうことになるシステム・仕組みが社会に潜んでいるという問題をスミスは指摘する。その仕組みとは、「キャッシュ・アカウント」という「前貸し」システムである。この「キャッシュ・アカウント」について、スミスは、「ある人が、確実な信用と十分な土地資産をもつ2人の保証人をたて、信用が与えられた一定額…の範囲内で前貸しされたどんな金額でも、要求がありしだい法定利子をそえて返済する」(p. 359; (二) 53頁)という解説をしている。このシステムを利用すれば、銀行による前貸し額の制限をすり抜けて、金庫に存在する金銀貨の量に関係なく、前貸し額が膨らんでいく可能性があるという訳である。「商人が、過剰取引 (overtrading) をしなくても、ある額の現金を必要としながら、しかも割引いてもらえる手形もないというばあいが、しばしばありうる。そのようなばあいに銀行が、彼の手形を割引くほかに、スコットランドの諸銀行のような楽な条件で、その金額を彼のキャッシュ・アカウントで前貸しし、彼の品物の折々の販売から入金するごとに小出しに返却することを認めるなら、彼は折々の請求に応じるために自分の貯えのある部分をつかわずに現金で手もとにおいておく必要を完全に免れることになる」(p. 367-368; (二) 63-64頁)。

ただし、この「キャッシュ・アカウント」を利用する場合でも、銀行は、顧客との取引に際して、顧客から「受け取る返済額が、…前貸額に完全に等しいかどうかを、たいへんな注意を払って観察」しなければ、「安全に取引することができない」(p. 368; (二) 64-65頁)ということ、「きわめて注意深くすべての顧客からの頻繁かつ規則的な返済を求め、…彼らのいわゆる頻繁で規則的な取引をしてくれないような人とは、けっして取引」しないようにしなければならない (p. 368-369; (二) 65頁)ということ、そして「自分たちの債務者が繁栄状態にあるのか衰退状態にあるのかについて、自分た

ちの帳簿books」を見て、返済が規則的であるか不規則的であるか判断を下さなければならない (p. 369; (二) 65頁) という事等、「キャッシュ・アカウント」を利用する場合の注意事項が存在することを指摘している。

とすれば、次のことが問題になろう。すなわち、「キャッシュ・アカウント」を利用する場合の原則を銀行がよく理解していたにもかかわらず、なぜ過剰な「前貸し」が行われ、その結果として「過剰紙幣」という事態が発生するに至ったのかということが問題になる。この問題について、スミスはどのように説明しているか、以下、スミスの論述に沿って見ていくことにしよう。

銀行家たちの思慮ある・適切な判断と行動を阻害する要因として、スミスは、企業家 (あるいは企画家・投機家) たちの特異な「事業の拡大 extension of the trade」意欲を指摘する。すなわち、このような企業家たちの特異な「事業の拡大」意欲が、銀行が設定する限度を超えた信用拡大を誘引することになると見る。「スコットランドのさまざまな銀行会社」は「銀行や銀行家が自分たちの利益と矛盾することなしに与えることのできるすべての援助を、スコットランドの商人やその他の企業家に、それほどまえから与えていたのである。彼らはそれ以上のことさえていた。彼らはいくらか過剰取引をし、この特殊な事業では最小程度の過剰取引にもかかわらずともなう損失、あるいはすくなくとも利潤の減少を招いたのであった。商人やその他の企業家は、銀行や銀行家からそれほど多くの援助を受けながら、さらに多くの援助を得ることを望んだ。彼らは銀行が、…望まれればどれほどの額にでも信用を拡大できる、と思っていたようである。彼らは、銀行の重役たちの考えが狭く、精神が卑劣だと不平を述べた。彼らにいわせればそれらの銀行は、国の企業活動の拡大に応じて自分たちの信用をひろげなかったのだが、彼らが事業の拡大という意味は、疑いもなく、彼らが自分たちの資本か、あるいは借用証書や抵当証書による通常のしかたで私人から信用借りをしたもので、運営できる以上に、彼らの企画を拡大することであった。銀行は名誉にかけてもこの不足を補い、商売に用いたいと思っているすべての資本を自分たちに提供しなければならない、と彼らは考えていたようである」

(p. 372-373 ; (二) 69-70 頁)。

スミスは、このような企業家たちの「事業の拡大」意欲が、「手形の振出しおよび逆振出しという慣行practice of drawing and redrawing」＝「便法」を生み出し・利用することに繋がったと見る。そして、このシステム＝「慣行practice」・「便法expedient」について、具体的事例を紹介しながら詳しく問題点の所在を議論していく。

「しかし銀行は意見を異にしている、彼らが信用の拡大を拒絶すると、そういう商人たちのなかにはつぎのような便法に訴えるものがあつた。それは、はるかに多額の経費をかけてではあるが、銀行の信用が最大限に拡張されるばあいと同じくらい効果的に、彼らの目的に、一時的には役だったのである。この便法は、手形の振出しおよび逆振出しという周知の方策にほかならず、ときどき不運な商人たちが、破産のせとぎわでとることがある方策なのである。このようにして貨幣を調達するというやりかたは、イングランドでは長いあいだ知られており、高い事業利潤が過大取引への大きな誘因となつたさきの戦争中に、大に行われたといわれている。それはイングランドからスコットランドへもちこまれ、そこでは、きわめて限られた商取引と きわめてささやかな国内の資本のわりには、まもなく、イングランドでかつてなされていたよりもはるかに大規模に行われるようになった」(p. 373-374 ; (二) 70-71 頁)。

見られるように、スミスは、銀行が企業家たちの「信用の拡大」欲求を拒絶すれば、企業家たちは「手形の振出しおよび逆振出し」という「慣行」・「便法」に訴えることになる：というのは、その方法は、多額の経費を必要とするが、「銀行の信用が最大限に拡張されるばあいと同じくらい効果」があるからであるという事情を指摘する。

その具体的な事例を、スミスは、エディンバラの商人AとロンドンのBとの間の「手形の振出しおよび逆振出し」つまりは「融通手形circulating bill」(p. 376 ; (二) 75 頁)・「融通為替手形 (circulating bills of exchange)」(p. 377 ; (二) 76 頁)による「融通による資金調達raising money by

circulation」(p. 376 ; (二) 73 頁) に即して説明している。「エディンバラの商人AがロンドンのBにあてて日付後2カ月払いの手形を振出すものと想定しよう。…ロンドンのBは、エディンバラのAに何の債務も負っていないのであるが、…手形の支払期限まえに、エディンバラのAにたいし、同一額に利子と手数料を加えた別の手形を、同じく日付後2カ月払いで逆振出しするという条件で、Aの手形を受け取ることに同意するのである。Bは…最初の2カ月以内にこの手形をエディンバラのAに逆振出しし、Aはまたつぎの2カ月以内に、同様に日付後2カ月払いの第2の手形をロンドンのBにあてて振出す。そして第3の2カ月以内にロンドンのBは、エディンバラのAにあてて、やはり日付後2カ月払いのもう一つの手形を逆振出しする。このやりかたは、ときには数ヶ月ばかりか数年間つづけられ、そのさい手形はつねに、それ以前の全手形の累積された利子と手数料とをともなって、エディンバラのAのところに戻ってくるのである。…このやりかたは融通による資金調達raising money by circulationとよばれた」(p. 375-376 ; (二) 72-73 頁)。

このように「手形の振出しおよび逆振出し」を「悪用」して「融通による資金調達」を行う企業家たちが多数現われることとなれば、やがて、銀行は、国内の流通に必要な金銀貨の量(銀行の貸付限度額)を超える過剰な紙幣を発行せざるをえない事態に至ることになるのである。「手形の振出しおよび逆振出し」に基づいて発行された多数の手形が割引されれば、紙幣の支払いが行われるが、それらの支払いは「まったく虚構のものaltogether fictitious」(p. 377 ; (二) 76 頁) である。

「エディンバラのAがロンドンのBにあてて振出した手形を、Aはいつも、それが満期になる2カ月まえに、エディンバラのある銀行…に割引いてもらい、またロンドンのBがエディンバラのAにあてて逆振出しした手形を、Bは…いつもイングランド銀行…に、割引いてもらった。このような融通手形 circulating bill にもとづいて前貸しされた金額は、…エディンバラではスコットランドの諸銀行の紙幣で前貸しされ、ロンドンで…は、…[イングランド銀行]の紙幣で前貸しされた。…期日がくるやいなや順々に返済された

にしても、第一の手形にもとづいて実際に前貸しされた価値は、…銀行に返ってくることは…なかった。なぜなら、…手形が満期になるまえに、…その手形よりも…額の大きい別の手形がつねに振出されたからであり、この別の手形を割引くことが、まもなく満期になる手形の支払いにとって、どうしても必要だったからである。したがって、この支払いはまったく虚構 altogether fictitiousのものであった。」(p. 377；(二) 75-76 頁)。

このような「融通手形」の割引に際して発行される紙幣は、国内の流通に必要な金銀貨の量を超える過剰発行の紙幣として流通することになる。そして、それらの過剰紙幣は、農業・商業・製造業における巨大で手広い企画のための資本になる。やがて過剰発行されたこの紙幣は、銀行に兌換を求めて復帰し、銀行の金庫から金銀貨が引き出されることになる。しかし、この過剰発行された紙幣は「企画家たちprojectorsがきわめて巧妙にたくらんでそれらの銀行から引き出した資本」である。銀行は、暫くそのことを知らないで過ごし、結果として「破滅的なruinous」事態を迎えることになるのである。

「そうした融通為替手形circulating bill of exchangeにもとづいて発行された紙幣は、多くのばあい、農業、商業、あるいは製造業の巨大で手広い企画を遂行するために予定された資金全体にまでなったのであって、たんにその一部分、つまり、もし紙幣がなかったならばその企業家が随時の請求に応じるために、使用せずに現金で手もとに保持していなければならなかったであろう部分に、とどまるものではなかった。そういうことでこの紙幣の大部分は、紙幣がなかったならばその国で流通したであろう金銀貨の価値を上まわるものだった。したがってそれは、その国の流通界が容易に吸収し使用しうる額を超えるものであり、それだから金銀貨と交換されるためにただちに銀行に復帰し、その金銀貨を銀行は全力をあげて見つけださなければならなかった。それは、そうした企画家たち (projectors) がきわめて巧妙にたくらんでそれらの銀行から引き出した資本であって、銀行はそのことを知りもせず熟慮して同意したのでもなく、おそらくしばらくのあいだは、自分たちがそ

れを実際に前貸ししたのではないかという、まったくわずかな疑念ももたなかったのである。」(p. 378；(二) 76-77 頁)。

ところで、われわれは、スミスがイングランドやスコットランドにおけるさまざまな信用・金融システムの「悪用」事例を紹介し議論しているのを見てきたが、しかし、それらは、過剰紙幣の発行の原因ではなく、あくまでも、過剰紙幣の発行を可能にした金融システム上の「諸条件」に過ぎないと言うべきであろう。先に見たように、スミスは、あくまでも、過剰紙幣の発行を引き起こした「根本原因」は「大胆な投機家の過大取引」であると指摘しているが、果たしてそうであろうか。

そこで、次の点を確認することにしよう。それは、スミスが、この「大胆な投機家の過大取引」[を引き起こす「根本原因」] についてどのように認識・理解していたのかという問題である。以下、この点をスミスの叙述に沿って確認しておこう。

まず、スミスが語っている幾つかの記述を見ておこう。

「大多数の商業企画で、貯えの通常の利潤が6ないし10パーセントであると想定される国で、収益が、…資金を借り入れるさいの巨額の経費を償うばかりでなく、その上さらに企業家に十分な余剰利潤を提供するとすれば、それはきわめて幸運な投機事業であったにちがいない。…企業家たちがこの大利潤を、彼らの黄金の夢 (golden dreams) のなかではっきりとみていたことは疑いない。しかし…目がさめてみると、この大利潤を見いだす幸運にめぐまれることはきわめてまれであった」(p. 376；(二) 73-74 頁)。

「その行動について私がいくらか説明をしてきた銀行の債務者たちは、大部分が夢想的な企業家 (chimerical projectors) で、融通為替手形の振出人であり逆振出人でもあることが多く、彼らが貨幣を使用しようとしたのは、どんな援助が与えられようともおそらくけっして完成できないような、たまたもし完成したとしても、実際にかかった費用をけっして償えず、それについて使用されたのと等量の労働を維持できる基金をけっして生み出せないような、途方もない事業 (extravagant undertakings) であった。」(p. 383-

384；(二) 85 頁)。

これらの叙述から、スミスが「大胆な投機家」についてどのような人々であると認識していたか、そして、彼らの「過大取引」についてどのような取引であると見ていたかということを理解することができよう。

スミスの言葉によれば、彼らは「通常の利潤が6ないし10パーセントであると想定される国で、収益が、…資金を借り入れるさいの巨額の経費を償うばかりでなく、その上さらに企業家に十分な余剰利潤を提供」するであろうという「黄金の夢 (golden dreams)」を見ていた企業家であり、そして、「どんな援助が与えられようともおそらくけっして完成できないような、または完成したとしても、実際にかかった費用をけっして償えず、それについて使用されたのと等量の労働を維持できる基金をけっして生み出せないような、途方もない〔浪費的な〕事業 (extravagant undertakings)」を企図する「夢想的な企業家 (chimerical projectors)」である。

彼らは、スミスが紹介している金融システムを悪用して、濡れ手で粟をつかむように、自己の「夢想的なchimerical」「途方もないextravagant事業」のために、欲しいだけの資金を手に入れようとする連中である。しかし、彼らが「黄金の夢」から「目がさめてみると」、「大利潤を見いだす幸運にめぐまれ」てはいなかったという、そして結果として、銀行がいろいろな方法を通じて発行し貸付けた紙幣は「紙幣の過剰供給」という結果になるのである。

事業家の「過大取引」は、彼らの抱く「黄金の夢」を実現するために行われる取引である。しかし、その実現可能性のない夢の実現のためのトライアルを可能にしているのは、あくまでも、「キャッシュ・アカウント」・「手形の振り出しと逆振り出し」・「融通手形」等の「資金調達」方法であり、このような方法が存在してこそはじめて、事業家の「過大取引」とその欲求に基づく紙幣の過剰発行が生じるというのが、スミスの基本的見方である。

スミスは、このような事態の推移について次のように述べている。すなわち、「商人やその他の企業家」は、商売に必要なすべての資本を自分たちに

銀行は提供しなければならぬと考えていたが、銀行が信用の拡大を拒絶すると、彼らは「手形の振出しおよび逆振出し」という「便法」に訴えた。それは、「ときどき不運な商人たちが、破産のせとぎわでとることがある方策」である。この貨幣調達方法は、元々は、「高い事業利潤が過大取引への大きな誘因となったさきの戦争中に、大に行われた」方法であったが、イングランドからスコットランドに持ち込まれ大規模化し実行された方法である (p. 373-374 ; (二) 70-71 頁), と。

元来は、「高い事業利潤が過大取引への大きな誘因」があった「さきの戦争中に、大に行われた」貨幣調達の方法であったが、スコットランドで大規模化し実行された時には、この方法は大規模化し「悪用」されることになったとスミスは考えたのである。スミスは、はっきりと、「不運な商人たちが、破産のせとぎわでとることがある方策」であると指摘している。

以上、われわれは、『国富論』におけるスミスの「紙幣過剰」問題の分析を見てきたが、いま、その内容を纏めてみると次のようになろう。

「紙幣過剰」という事態が発生するに至るプロセスの出発点として、スミスは、まず、「大胆な投機家の過大取引」を指摘する。しかし、「大胆な投機家」とは、どのような人々のことか。スミスは次のような表現を用いて彼らのことを指弾する。「通常の利潤が6ないし10パーセントであると想定される国で、収益が、…資金を借り入れるさいの巨額の経費を償うばかりでなく、その上さらに企業家に十分な余剰利潤を提供」という「黄金の夢」を見る企業家：「夢想的な企業家で、融通為替手形の振出人であり逆振出人でもることが多く、…どんな援助が与えられようともおそらくけって完成できないような、またもし完成したとしても、実際にかかった費用をけって償えず、それについて使用されたのと等量の労働を維持できる基金をけって生み出せないような、途方もない事業」(p. 384 ; (二) 84-85 頁) を企画している企業家である、と。

スミスが「紙幣の…過剰流通の根本原因は、…大胆な投機家の過大取引」である (p. 366 ; (二) 62 頁) と言うときの「大胆な投機家」とは、要する

に、「黄金の夢」を見る企業家・「夢想的な企業家」・「途方もない事業」を企画する企業家である。文字通り、彼らの企画する事業は、「夢想的な」・「途方もない」事業であり、大きな利益を生み出したり大きな成功を収めるような事業では決してないのである。

「大胆な投機家」たちが「黄金の夢」「夢想」に基づいて「途方もない事業」を企画することによって、彼らが「過大取引」をしているというのが、「紙幣の過剰流通」問題に対するスミスの見立てである。したがって、彼らの「過大取引」は、経済の現実過程（資本の過剰蓄積）に誘引されて引き起こされた取引ではないと言うことができよう。現実の根拠なき「夢想」に基づいて、「大胆な投機家」が、「キャッシュ・アカウント」・「手形の振り出しと逆振り出し」・「融通手形」等の「便法」を利用して、銀行からの過剰な貸付けを引き出すことによって、「過大取引」に突き進んでいった結果、「紙幣の過剰流通」という事態に至ったというのが、スミスの見立てである。

『国富論』においてスミスが見ていた「紙幣過剰」という事態の内実がこのようなものであるとすれば、それは、『資本論』第3部におけるマルクスの「資本の過多」論やその源流とされる『通貨調節論』（1844年）⁴⁾におけるフラートン（Fullarton, John）の「[資本の] 過多plethora [of capital]」論とは、全く異なる事態であると言わなければならない。マルクスとフラートンは、「資本の過多」が発生するに至る事態の経過の出発点として、利潤率の低下に起因する資本の過剰蓄積というリアルな経済過程の問題を指摘している。スミスは、根拠なき「夢想」に基づいて、「大胆な投機家」が「キャッシュ・アカウント」等の「便法」を悪用する結果として「紙幣過剰」が発生するとしている。マルクスらの立場から見て肝心の問題、すなわち「大胆な投機家」たちが何故にそのような「悪夢」（心理状態）を抱くようになったのかという点については、スミスは一切説明していないのである。

4) John Fullarton, *On the Regulation of Currencies*, 1844. (福田長三譯『通貨論』岩波文庫、昭和16年。翻訳は原書第2版、1845年からの訳本)。訳本では旧仮名遣い・旧漢字が使用されているが、訳文の引用に際しては、旧仮名遣いはそのママ使用し、旧漢字は新漢字に変更して引用することにする。

以下、この点をもう少し立ち入って検討するために、マルクスとフラートンの「資本の過多」論の内容を、筆者旧稿⁵⁾を振り返りつつ確認することにしよう。

V. アダム・スミスの「紙幣過剰」とジョン・フラートン、カール・マルクスの「資本の過多」

(1) まず、フラートン著『通貨調節論』の「資本の過多」論を見ておこう。

フラートンは、同書「第8章 地金の流出の諸原因とその意義」後半箇所において、「資本の過多」に関わる議論を展開している。

「外国証券への投資は、国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰部分 (overflowings of domestic capital, which exceed the immediate capacity of advantageous employment offered by the home-market) にとって、しばしば便利にして重宝な捌け口となるものであり、…その配下にある外国の産業からの所得を獲得してゆくことによつて、一社会の富と繁栄が促進される」⁶⁾。

「熱狂的な投機心と冒険心 a wild spirit of speculation and adventure は、必ずしも市場金利の久しきにわたる低落によつて促進されるものではなくて、むしろ、…投機的興奮 speculative excitement の激しい発作の根底には、資本にたいして安全にしてしかも生産的な投資口を見出すことの困難が横たはつてゐるといふこと——これこそ一つの真理」である⁷⁾。

「私は、こゝで、資本の過剰供給 over-supply of capital ごときことが果たして可能であるか否かについて、経済学者間にかくも多く論争されてきた抽象的な問題に深く立ち入らないが、…敢て次のことは断言できると思ふ、す

5) 拙稿「マルクスの「資本の過多 Plethora of Capital」概念の形成」『経済経営論集』(桃山学院大学) 第54巻第2号, 2012年10月, 拙稿「マルクスの「資本の過多 Plethora of Capital」概念の源流を求めて」『経済経営論集』(桃山学院大学) 第58巻第2号, 2016年10月。

6) John Fullarton, *ibid.*, p. 155. (ジョン・フラートン, 前掲訳本, 202頁)。

7) *ibid.*, p. 161 (同上書, 210頁)。

なはち、イギリスの現社会機構のもとにおいては、所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝（the annual savings from income and the large fortunes in constant course of remittance from the colonies）によつて、生産的な投資口を追求する資本の分量（the amount of capital seeking productive investment）が正常時において急速に集積され（accumulates）、それを有利に利用する手段の増大と甚しく均衡を失してゐることこれである。⁸⁾。

これらの叙述において、フラートンは、「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」の背景にある「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」がどのように発生するか」という問題について、「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」によって「生産的な投資口を追求する資本」が急速に蓄積されるが、「それを有利に利用する手段」＝「投資口」がそれほど増大しないため、「資本の過剰供給」という事態が発生することを明確に指摘している。フラートンは、「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」を引き起こしたのは、「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」であると考えている。「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」によって、生産的な投資口を追求する資本の分量」が急速に蓄積されるにも拘わらず、「それを有利に利用する」投資口がそれほど増大しないために「国内資本の過剰」が発生するからこそ、そのはけ口を求めて、「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」が引き起こされると見ているのである。

図式化して示せばこうである。「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」の集積→「生産的な投資口を追求する資本」の蓄積→「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」の累積→「すばらしい儲

8) *ibid.*, p. 162. (同上書, 211頁)。

け口の幻想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」→「資本の過多plethora」事態の発生》。

(2) 次に、マルクスの『資本論』における「資本の過多」論を見ておこう。

マルクスは、「資本の過多plethora of capital」に関わる議論を『資本論』に至る準備草稿の幾つかの箇所（「1857-58年草稿」ノートⅦ，「1861-63年草稿」ノートⅩⅥ記載の草稿「第3章 資本と利潤」，「1861-63年草稿」ノートⅩⅢ部分，『資本論』第3部草稿のエンゲルス編集・第3篇第15章第3節相当部分の冒頭，『資本論』第3部草稿の第5章部分等）において行っている⁹⁾。いま、その内容が比較的理解しやすい『資本論』第3部第3篇第15章第3節冒頭の論述に即して見ておこう。

「利潤率の低下につれて、労働の生産的充用のために個々の資本家の手になければならない資本の最小限は増大する。…それと同時に集積も増大する。この最小限は、労働の搾取一般のためにも、また充用労働時間が商品の生産に必要な労働時間であるためにも、すなわち充用労働時間が商品の生産に社会的に必要な労働時間の平均を越えないためにも、必要である。それと同時に集積も増大する。なぜならば、ある限界を越えれば、利潤率の低い大資本のほうが利潤率の高い小資本よりも急速に蓄積を進めるからである。この増大する集積は、それ自身また、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって、分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多は、つねに根本的には、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本——そして新たに形成される資本の若枝はつねにこれである——の過多に、または、このようなそれ自身で独自に行動する能力のない資本を大きな事業部門の指導者たちに（信用の形で）用だてる過多に、関連している。こ

9) マルクスの「資本の過多plethora of capital」に関わる議論の詳しい内容は、拙稿「マルクスの『資本の過多Plethora of Capital』概念の源流を求めて」を参照ください。

のような資本過多は、相対的過剰人口を刺激するのと同じ事情から生じるもの…である。といっても、…一方には遊休資本が立ち、他方には遊休労働者人口が立つのであるが¹⁰⁾。

このマルクスの「資本の過多」論の内容を図式化して示すと次のようになろう。

◀利潤率の低下につれて、資本の最小限は増大する。同時に集積も増大する。増大する集積は、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす。したがって、分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多に関連している。▶。

(3)『通貨調節論』におけるフラートンの議論と『資本論』におけるマルクスの議論に関して、次のように言うことができよう。

フラートンの議論は、こうである。《「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」の集積→「生産的な投資口を追求する資本」の蓄積→「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」の累積→《「すばらしい儲け口の幻想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」→「資本の過剰plethora」事態の発生》。

これと同主旨の議論を、われわれは、マルクスの論述のなかにも見出すことができよう。◀利潤率の低下につれて、資本の最小限は増大する。と同時に資本の集積も増大する。増大する資本の集積は、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす▶。◀分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。すなわち、投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多という事態は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多に関連して発生する▶。

10) Karl Marx, *Das Kapital*, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 25, Dietz Verlag, Berlin, 1964, S. 261. (岡崎次郎訳『資本論』大月書店、国民文庫版(6), 1972, 409-410頁)。

こう見てくると、フラートンの議論とマルクスの議論は、アダム・スミスの「紙幣過剰」分析とは、その内容が大きく異なっていることが分かるであろう。

フラートンの《「すばらしい儲け口の幻想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」→「資本の過剰plethora」事態の発生》という説明、マルクスの《分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。すなわち、投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多という事態は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多に関連して発生するのである》という説明は、スミスの「紙幣過剰」発生プロセスの説明内容とほぼ同じ内容が含まれているように思われる。

しかし、スミスにおいては、フラートンにおいて言えば、《「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」>がなにゆえに発生するのか》ということが説明されていない。フラートンにおいても、マルクスにおいても、このような<「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」>という「心理状態」がなにゆえに発生してくるのかということが、重要な論点として明確に指摘されている。

フラートンでは、《「所得からの年々の貯蓄と植民地からの不断に現送される巨額の財宝」の集積→「生産的な投資口を追求する資本」の蓄積→「国内市場の提供する資本のための有利な運用口の直接的な包容力以上に超過する国内資本の過剰」・「資本の過剰供給」の累積》と説明されており、また、マルクスにおいては、《利潤率の低下につれて、資本の最小限は増大する。と同時に資本の集積も増大する。増大する資本の集積は、ある高さに達すれば、利潤率の新たな低下をひき起こす。その結果、分散した小資本の大群は冒険の道に追いこまれる。すなわち、投機、信用思惑、株式思惑、恐慌へと追いこまれる。いわゆる資本の過多という事態は、利潤率の低下が利潤の量によって償われない資本の過多に関連して発生するのである》と説明されている。

フラートンでは<「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」>という心

理状態に、そして、マルクスでは<「投機、信用思惑、株式思惑」>という心理状態に、人々を追い込んでいく経済的な原因が、事態の究極の原因として明確に指摘されている。

この<「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」>という「心理状態」の「根本的な発生原因」の分析の有無は、問題の理解にとって決定的に重要な認識であると思われる。スミスにとっては、偶然現われる「大胆な投機家」の根拠無き「夢想」に基づく「熱狂的な投機心と冒険心」の結果、「紙幣過剰」という事態が発生するのであるが、フラートンやマルクスにとっては、現実の資本の過剰蓄積・過剰供給の結果として、必然的に<「熱狂的な投機心と冒険心」「投機的興奮」><「投機、信用思惑、株式思惑」>という「心理状態」に人々が追い込まれていくのである。

スミスにとっては、「紙幣過剰」の根本原因は「連合王国の両地方の何人かの大胆な投機家」の「夢想」という心理状態にあると捉えているのに対して、フラートンやマルクスにとっては、「資本の過多」の根本原因は資本主義経済の発展に必然的に伴う資本の過剰蓄積・過剰供給という現実の事態にあると捉えているのである。

VI. 「紙幣過剰」事態に対するアダム・スミスの対処

最後に、スミスは「紙幣過剰」という事態・問題に対してどのように対処しようと判断していたのかという問題を考えてみよう。

スミスは、「紙幣過剰」事態に関してフラートンやマルクスとは異なる「根本原因」を指摘している。したがって、当然、問題への対処も、フラートンやマルクスとは異なるものとならざるを得ない。

本稿で見てきたように、「紙幣過剰」発生のプロセスの出発点として、スミスは、「何人かの大胆な投機家 some bold projectors」(p. 366; (二) 62頁)の「夢想」を指摘している。しかしながら、彼は、その「夢想」を遡って、そのような「夢想」を「投機家」が抱くことになる真の「根本原因」については言及していない。それゆえ、「紙幣過剰」発生のプロセスの出発点

にまで遡って問題の発生を抑止するための真に有効な対策を指摘することができないでいる。だからこそ、彼は、「紙幣過剰」の「根本原因」であるとする「投機家」の「夢想」については如何ともし難いと考え、それによって引き起こされざるを得ない銀行会社の「破綻」リスクを分散させ、社会全体に重大な影響を与えないようにする方途を考えたのではなかろうか。「紙幣過剰」の「根本原因」が「何人かの大胆な投機家」の「夢想」であるが故に、スミスは、問題の「根本原因」である「夢」を抑止することができないと判断し、その「原因」である人々の「心理状態」を砕くことは諦めざるを得ないと判断したのではなかろうか。

この点に関連してスミスが次のような論述をしている。「社会全体の安全をあやうくするかもしれないような少数の個人 a few individuals の自然的自由の行使は、もっとも専制的な政府であろうと、もっとも自由な政府であろうと、あらゆる政府の法律によって抑制されているし、また抑制されるべきものである。火災がひろがるのを防止するために障壁をつくるのを義務づけることは、ここで提案されている銀行業の規制とまったく同種類の、自然的自由の躍躍なのである」(p. 393 ; (二) 98-99 頁)

この論述の要点は、「社会全体の安全」をあやうくする「少数の個人 a few individuals の自然的自由の行使」は、「抑制されるべきものである」、ということである。この考え方に従えば、根拠なき「夢想」に基づいて無謀な投機を行う「連合王国の両地方の何人かの (some) 大胆な投機家」たちの「紙幣過剰」を惹起するような行為は「抑制されるべきものである」と判断されるはずである。しかし、スミスはそう判断しない。その理由は何か。それは、彼らの行為を「抑制」するのは、そう簡単ではないと判断したからであろう。「何人かの (some) 大胆な投機家」の「夢想」に基づく行為を有効裏に「抑制」することはそう簡単ではない、そのような行為を「抑制」するためには「キャッシュ・アカウント」・「手形の振り出しおよび逆振り出し」・「融通手形」等を含む手形発行・手形割引などの信用システム・金融システムの規制に手を付けざるを得ない。しかし、それは社会全体の信用システ

ム・金融システムに関わる問題であり、そう容易くできるはずがない。また、すべきではないと判断したのではなからうか。そうであるが故に、スミスは、次のような言葉で、『国富論』第2篇第2章を結んでいるのではなからうか。

「もし銀行家たちが一定金額以下の流通銀行券つまり持参人払いの手形の発行を抑止されるならば、またもし彼らがそのような銀行券にたいし呈示しだい即時かつ無条件に支払う義務を負わされるならば、彼らの業務は他のすべての点で完全に自由にしても、公共の安全にとってさしつかえない。連合王国の両地方での銀行会社の最近の増加は、多くの人びとに大きな不安を与える出来事ではあったが、それは公共の安全保障を減少させるどころか、むしろ増大させている。それは彼らのすべてをいっそう慎重に行動させ、彼らの通貨が彼らの現金にたいする適切な比率を超えないようにすることによって、きわめて多数の競争者との敵対関係からつねに彼らにたいしておこりがちな悪意の取付けにあわないように自衛せざるをえなくする。それはそうでないばあいよりそれぞれの個別会社の銀行券の流通を狭い範囲内に限定し、その流通銀行券を少なくする。全流通をもっと多くの部分に分割することによって、どれか一つの会社の破綻という、ものごとのなりゆき上ときとしておこらざるをえない事故が、公共にとってもつ重大さは減少する。この自由競争はまた、すべての銀行業者を、競争相手に顧客をさらわれないために顧客との取引において、いっそう寛大にならざるをえなくする。一般的にいえば、もし事業のどれかの部門、あるいは労働のどれかの部分が公共にとって有益なものであるなら、競争が自由で全般的であればあるほど、それはつねにますます有利なものになるだろう。」(p. 399-400；(二) 107-108 頁)。

ここに述べられているのは、次のような内容・意味であると見ることができよう。《<「一定金額以下の流通銀行券」発行抑制や銀行券の「選択項目」禁止>という（ある意味において）実行・実現可能な規制が行われさえすれば、銀行業務は「完全に自由」にされるべきである。なぜなら、銀行会社の増加は、個別会社の銀行券の流通を狭い範囲内に限定し、どれか一つの会社

が破綻しても、公共にとってもつ重大さを分散・減少させることができると判断できるからである》、と。

(まつお・じゅん／経済学部特任教授／2017年11月15日受理)

Adam Smith's Analysis of "Excessive Circulation of Paper Money" in *The Wealth of Nations*

MATSUO Jun

While Adam Smith on many occasions refers to the phenomenon of "over-stocked with commodities" in his *An Inquiry into the Nature and Causes of The Wealth of Nations*, Smith's basic position is that an oversupply of commodities cannot generally occur. However, with regard to currency (money and paper money), Smith employs such terms as "over-stocked with paper money" and "excessive circulation of paper money," and expends a considerable number of pages in his book to examine the phenomenon of "excessive circulation of paper money" and to analyze in detail the causes of this excess from various perspectives.

Smith's basic position is that the volume of paper money in circulation should be equal to the value of the gold and silver money that it replaces, and that it cannot exceed the total value of gold and silver money. However, Smith confronts a situation where the volume of paper money in circulation actually exceeds the total value of the gold and silver money that it supposedly replaces.

Regarding the "original cause" of the "excessive circulation of paper money," Smith states: "The over-trading of some bold projectors in both parts of the United Kingdom was the original cause of this excessive circulation of paper money."¹¹⁾

As long as banks make "advances" with propriety and within limits, "excessive circulation of paper money" cannot occur. However, a mechanism exists whereby banks can easily exceed such limits, which Smith identifies as "cash accounts." The question is why banks, which can

11) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, vol. I, p. 366

be assumed to have a good understanding of the use of “cash accounts,” engage in “excessive advances,” which results in the “excessive circulation of paper money.” Smith refers to the factor that undermines the prudent and appropriate judgement of bankers as the peculiar desire of traders to “extend their projects.” Smith observes that the desire of traders to “extend their projects” gives rise to and promotes the use of the “practice of drawing and redrawing” (= “expedient”). If numerous traders “abuse” the “practice of drawing and redrawing” to raise money, this will eventually leave banks with no choice but to issue paper money in excess of the gold and silver in domestic circulation (the limit of lending by banks).

Smith’s “bold projectors” are those who abuse the financial system to raise as much money as they desire so that they can rake in the profits through their “chimerical” and “extravagant undertakings.”

Projectors undertake “vast and extensive projects” to realize their “golden dreams.” What is used to realize these “golden dreams” are such means of “raising money” as “cash accounts,” “drawing and redrawing promissory notes,” and “circulating bills.” Smith believes that the use of these methods supports the “vast and extensive projects” of projectors and the demands of projectors give rise to excessive circulation of paper money.

The “vast and extensive projects” of projectors are not undertakings that arise at the end of a real economic process (process of accumulation of excess capital). They are based on unfounded “dreams” that are undertaken by “bold projectors” who extract excessive bank loans by using such “expedients” as “cash accounts,” “drawing and redrawing of promissory notes,” and “circulating bills.” This allows the pursuit of “vast and extensive projects” which result in the phenomenon of “excessive circulation of paper money.”

If this is the reality of Smith’s theory of “excessive circulation of paper money,” it must be said that Smith’s theory is fundamentally different from Marx’s concept of “plethora of capital” as expounded in Part III of *Das Kapital*, and Fullarton’s concept of “plethora [of capital]” found in his

Regulation of Currencies (1844), which is considered to be the antecedent to Marx's "plethora of capital."

Marx and Fullarton point to the accumulation of excess capital caused by falling profit rates as the starting point in the process that gives rise to "plethora of capital." In contrast, Smith posits that "excessive circulation of paper money" results from the "vast and extensive projects" that are based on the "dreams" of "bold projectors." However, Smith provides no explanation for why "bold projectors" entertain such "nightmares."

In a previous paper on the subject of "plethora of capital" in the works of Marx and Fullarton, I wrote as follows.

Fullarton discusses "plethora of capital" in the latter part of Chapter VIII of his *Regulation of Currencies*. The content of this section can be schematized as follows. The accumulation of "annual saving from income and the large fortunes in constant course of remittance from the colonies" → accumulation of "the amount of capital seeking productive investment" → accumulation of "over-flowings of domestic capital, which exceed the immediate capacity of advantageous employment offered by the home-market" and "over-supply of capital" → "splendid visions of gain" based on a "wild spirit of speculation and adventure" and "speculative excitement" → give rise to the condition of "plethora of capital."

Marx's discussion of "plethora of capita" appears in the first part of Chapter 15 Section 3 of Volume III Part III of *Das Kapital*, the content of which can be outlined as follows. "As the profit rate falls, so there is a growth in the minimum capital... Concentration grows at the same time... This growing concentration leads in turn, at a certain level, to a new fall in the rate of profit. The mass of small fragmented capitals are[sic] thereby forced onto adventurous paths: speculation, credit swindles, share swindles, crises. The so-called plethora of capital is always basically reducible to a plethora of that capital for which the fall in the profit rate is not outweighed by its own mass."¹²⁾

The theories of Fullarton and Marx greatly differ from the content of Smith's theory of "excessive circulation of paper money." Both Fullarton

12) Karl Marx, *Capital*, volume III, Penguin Books, 1981, p. 359.

and Marx place emphasis on why the psychological conditions of “wild spirit of speculation and adventure” and “speculative excitement” are generated. On the other hand, Smith provides no explanation for the occurrence of conditions that Fullarton calls “wild spirit of speculation and adventure” and “speculative excitement.” In Smith’s conception, the “wild spirit of speculation and adventure” that results in “excessive circulation of paper money” is based on the unfounded “dreams” of “bold projectors” who appear accidentally. By contrast, in the theories of Fullarton and Marx, people are inevitably forced into the psychological conditions of “wild spirit of speculation and adventure” and “speculative excitement” that leads to “speculation, credit swindles, share swindles” as a consequence of the over-production and over-supply of real capital. Smith considers the original cause of “excessive circulation of paper money” to be the psychological condition of the “dreams” of “some bold projectors in both parts of the United Kingdom.” By contrast, Fullarton and Marx identify the fundamental cause of “plethora of capital” to be the real phenomenon of the over-production and over-supply of capital that inevitably occurs in the course of capitalist development.